法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-18

関口先生追悼集

渡邊, 誠 / 井上, 奉生 / 梶, 裕史 / 大森, 正之 / 中川, 宗人 / 雨宮, 萌果 / 伊藤, 拓 / 片柳, 和果 / 川崎, 陽子 / 久野, 来羽 / 窪田, 早紀 / 小林, 淳一 / 坂井, 彩美 / 鮫島, 啓佑 / 菅原, 和利 / 鈴木, 絢子 / 髙田, 琴子 / 武正, 泰史 / 田中, 慎太郎 / 中村, 俊也 / 西川, 恭子 / 西川, 志津雄 / 林田, 実 / 樋原, 亘 / 伯耆原, 匠 / 北條, 健 / 元村, 麻美 / 山本, 菜摘 / 山本, 真大 / 越智, 裕一 / 四戸, 純一 / 山田, 元紀 / 長峰, 登記夫 / Watanabe, Makoto / Inoue, Tomoo / Kaji, Hiroshi / Oomori, Masayuki / Nakagawa, Muneto / Amamiya, Moeka / Itou, Taku / Katayanagi, Waka / Kawasaki, Yoko / Hisano, Kureha / Kubota, Saki / Kobayashi, Junichi / Sakai, Ayami / Samejima, Keisuke / Sugawra, Kazutoshi / Suzuki, Ayako / Takada, Kotoko / Takemasa, Yasufumi / Tanaka, Shintarou / Nakamura, Toshiya / Nishikawa, Kyoko / Nishikawa, Shizuo / Hayashida, Minoru / Hihara, Wataru / Houkibara, Takumi / Houjyou, Takeshi / Motomura, Asami / Yamamoto, Natsumi / Yamamoto, Masahiro / Ochi, Yuichi / Shinohe, Junichi / Yamada, Motonori / NAGAMINE, Tokio

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / The Hosei Journal of Sustainability Studies

(巻 / Volume)
19

(号 / Number)
2

(開始ページ / Start Page)
1

(終了ページ / End Page)
57

(発行年 / Year)
2019-03-31

関口和男先生追悼集の発行に寄せて

法政大学人間環境学部長　渡邊　　誠

法政大学元人間環境学部長の関口和男先生は2017年3月8日、69歳で逝去されました。ここに謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

関口先生は1948年のお生まれで、早稲田大学法学部をご卒業後、同大学大学院政治学研究科および文学研究科を修了されました。1995年に、現在の人間環境学部の前身ともいえる第二教養部へ助教授として着任され、その後教授となられました。主として宗教論を担当されました。第二教養部教授会におきましては主任を務められ、当時の教学改革にご尽力されるなど人間環境学部の創設に多大なご貢献をされました。2011年からの2年間は人間環境学部長としての重責を担われ、学部運営の中心としてご活躍されましたことは我々の記憶に新しいところです。先生は、法政大学専任教員として着任されてから22年間、そのうち教授になられてから20年間にわたり本学におきまして教鞭を執られるなど、法政大学の教育・研究の第一線でご活躍されました。ここに、先生の多々なるご貢献に対しまして敬意の念を捧げますのと同時に心より感謝を申し上げます。

1999年に人間環境学部が設立されましてからは、人間と環境に関する学際的なテーマにつきまして人文分野からアプローチすることを模索されました。先生は、人間環境学部設置の際の新設科目としまして「環境哲学基礎論」および「仏教思想」などを新しく開拓し創設されるなど、人文分野の柱としてご活躍されました。この間、先生はご自身の研究にも精励され、多くの論文を執筆されております。私の記憶に強く残されておりますのは、2011年に発表されました「科学者の社会的責任とは何か？―フランク・レポートの内容分析を通して―（人間環境論集第11巻第1号）」という論文です。そこでは現代社会における科学技術のあり方に関することが考究されました。現在の人間環境学部における重要なテーマとして認識されております科学技術政策の問題と強く関連する内容です。この

論文は人間環境論集上で 2011 年 2 月 28 日付で発行されたものですが、同年 3 月には東日本大震災が起きました。福島において抱えた社会的課題は、科学者の社会的責任の問題としても現在議論されております。先生ご執筆のこの論文の発行日が震災の直前でありました偶然に極めて強い驚きを感じた次第です。

2017 年 6 月 18 日に関口和男先生を追悼する集会を先生のゼミナール卒業生と共に人間環境学部として主催させていただきました。当日は先生のご家族様のご出席を賜りました。また先生を慕う学部の卒業生を始めとし、教職員、退職された元同僚教員など多数の皆様のご参列を賜りました。ご参列いただきました皆様に心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。この度、関口先生と生前ご関係を深くされておりました皆様からの寄稿をいただくことができました。ここに関口和男先生追悼集としまして本論集にて発行させていただきます。なお、集会当日におきましてご参列いただきました皆様から会費を徴収いたしましたが、その残金を本論集発行の費用の一部として使わせていただいております。ご理解を賜りたくお願い申し上げます。

最後にご報告させていただきたいことがございます。2017 年度におきまして、関口先生のこれまでの多大なるご功績に対しまして法政大学から「名誉教授」の称号が授与されております。先般、墓参しまして先生にご報告をいたしました。また、ご家族の皆様に称号記をお渡しさせていただきました。故関口和男先生に心から哀悼の意を表します。

2019 年 3 月 1 日

関口先生を悼む

人間環境学部名誉教授　井上　奉生

あなたが黄泉路へ旅立ってから早２年、ほんとうに時が経つのは早いものだ。あなたの気が短いのは知っているつもりだったが、何もそんなに急がなくてもよかったじゃないか。

小生は今でも面倒なことがあると、関口先生、あなたに相談しようと思うことが多々あるのだが、あ、そうかあなたは本当に逝ってしまったんだねと、時をおかずに現実に引き戻される。

先にリタイヤした小生はたまに大学に行くことがある。それは講義の終わった後、あなたと学生達と居酒屋で一杯やることが楽しみだったのである。本当に寂しいよ。

さて、あなたと本格的に付き合ったのは今の人間環境学部の前身、第二教養部の執行部時代であった。小生が部長、あなたが主任、梶、長峰の両先生が副主任で､あなたが中心となって小生を支えてくれた。新学部設置という時期でもあり、理事や他学部の執行部、ひいては文科省との折衝用の資料作成等々多忙な事柄が山積していた。他にも学生問題、カリキュラム問題等々があったが、あなたは快刀乱麻のごとく次々と諸問題を解決し、小生も含め、周囲の人々を驚嘆させたこともあった。また、フィールド・スタディで一緒に学生を指導した時の事が思い出される。一例であるが、伊豆のワサビ田見学で、小生は渓流の水温・水質を中心に解説しているのだが、あなたはワサビの効用や副える対象食物の話を学生に面白おかしくレクチャーしていた。学生は水の物理・化学より、身近な生活に密着した話の方が有益だと考えたのだろう。その証拠にその後すぐに、蕎麦や刺身談義に花を咲かせていた。

このように、あなたは高い事務能力あるいは学生の考えている事を瞬時に理解する能力を持っていた。

関口先生、あなたは多趣味で特に模型作成やパソコン操作が得意で、小生もよくパソコンでは世話になったものだ。

関口先生、やはりあなたは小生にとって最高の友だ。縁あらば千里という。あちらの世界では暇は沢山あるだろう。好きな趣味を精一杯やってくれ。小生もこちらで残りの時間は少ないが野良仕事に精を出すつもりだ。日時は決められないがそのうち会いに行くよ。

関口先生の思い出

梶　　裕史

私が現在の学部の前身である第二教養部に着任したのは1996年で、同じ人文分野に、1年前に着任された関口先生がおられた。先生より一回り年下の若造の私と違って、この先輩は就任2年目に人文分野主任（複数学科がある学部の学科主任にあたる）、3年目には早くも教授会主任と、頼もしい「即戦力」として活躍された。そして有能な分だけ、先輩の老教員から受ける様々な僻みや意地悪な視線を一身に受け――私からみれば「盾」のようになってくれたおかげで、私はマークが薄い新任教員としてのびのびと過ごすことができた。

先生との親交が深まったのは、1998年（人間環境学部誕生前夜）に教授会執行部の副主任を務めて以来である。井上奉生先生が学部長、関口先生が教授会主任で、この名コンビの下で、様々な生きた「実践知」を学ばせてもらった。

お二人が飲みに行くのにもよくご一緒させて頂いたが、学部における関口先生を語るうえで、井上先生との交友関係は欠かせないものである。二人はかなり異なるお人柄で、たとえば教授会において副主任の役割である「議事録」を作る際に、その対照が際立って面白かった。井上先生は、言葉だけではない不思議な人間力、温かい包容力と、大雑把なようでいて細心の動物的な勘の持ち主であったが、井上先生の発言、説明を文章化するのは大変であった。言葉というより人間力で説得するようなところがあって、口述をそのまま写したのでは何を言っているのか分からない（笑）。補わないと整然とした文章にならないのである。それに対して関口先生は言語明晰で、発言をそのまま記録してもきちんと論理的な文章になる鋭い切れ味があった。関口先生は、自分とは異質の人間性を持った井上

先生に惚れ込み、信頼できる上司に留まらず、終生の友を見出されたのであった。井上先生と親しくなってから、関口先生は私の目からみても、何かの桎梏から解放されたように明るくなられたと思う。

二人が進めるミーティングや会議は、話がまとまるのが早くて非常に短かった。そして、「この二人は何と悪党なんだろう（笑）」と度々思ったものである。悪党、といっても私利私欲に走るワルではなく、いわば正義の、誠実な悪党である。世の中にこれほど厄介で、無敵の存在もないであろう。

関口先生とのただならぬ縁を感じずにいられなかったのは、自分が教授会主任を務めた2年目、東日本大震災があった年である。或る学生問題により、学部長（長峰先生）が辞任せざるを得なくなり、独りぼっちになって途方にくれていた三月、次年度に研究休暇の予定だった関口先生が、それを返上して学部長を引き受けて下さることになった。忘れもしないが、ある夜、井上先生から電話があり、「いま関口さんと○○で飲んでいる。話があるから来い」と誘われ、出向いてみたら、関口さんが学部長をやってくれると言っているので、お前その段取りを整えよ、と指示を受けた。聞いて即座に、このタイミングを捉えて関口学部長の発想を思いついたのは井上先生にちがいない、と悟った。

こうして2011年度、関口先生とは二度目の執行部を一緒に務めることになった。学部長としての関口先生は、自分の理想像である井上先生に倣おうとされていたように思う。内政（学部のこと）は全て梶に任せる、責任は自分がとるから好きにやってよい。――部下としてこれほど働きやすい環境はない。関口先生とは長いつきあいゆえ、以心伝心で仕事ができた。井上学部長の時と同じく、執行部会議などは非常に短かった。

教授会進行の際に驚いたことがある。主任の時代にあれほど論理明晰でよどみなく話されていた関口先生が、たまに何を言っているのか分からない時があった。井上先生に似てきたかな、と横で聴いていて可笑しかった。

失礼な興味かもしれないが、関口先生という方は、人間として器用な方だったのか、不器用な方だったのか、未だに判断に迷うところがある。哲学・思想の徒でありながら、手先は非常に器用で、趣味のラジコンをはじめPCなどメカに強いというユニークな面を持っておられた。また、処世術というと誤解を招くかも

しれないが、ある政治的状況に関して、与党になることも手強い野党になることも出来る方であったと思う（不誠実、というのともちろん異なる）。しかし精神的にはどうであったのだろう。奥様によると、寂しがり屋であったという。関口先生の奥様は、先生がこの世でもっとも恐れる方であり（笑）、私はよく先生に「関口先生と喧嘩したらまず勝ち目はないが、奥さまを味方につければ勝てるかもしれません」と冗談半分で申し上げたものだが、この奥様への深い愛情といい、井上先生への一途な敬愛といい、多数の人と如才なくつきあうということは、実は苦手な方だったのかもしれない、とも思う。

言い換えれば、人を選ばれるのである。一回り下の私が、先生の目からみてどう思われていたのか、はなはだ自信がないが、今となって悔やまれることは、学部草創の初期は、井上先生と３人でよく飲み、後輩として可愛がってもらったのに、やがてその回数が減ってしまったことである。原因は単純で、ある時期から私と関口先生とでゼミの曜日・時間帯が重なって、それぞれ毎週のように催すゼミの飲み会が重なるようになったことで、一緒に飲んでお話する機会が減ったということである。まあいつでも先生とは飲める、という身近な安心感がよくなかったと反省される。

井上先生も書いておられるが、関口先生にお聴きしたい、相談したいことが今もさまざまある。生来、せっかちであるゆえか、70歳定年を待たずに旅立たれてしまった。「俺になんか聞く必要ないよ。梶さんの思うようにやればいいさ」とおっしゃりそうな気もするが、市ヶ谷リベラルアーツセンター長（＝かつての教養部長にあたる）を務めたり、あるいはそろそろ学部の人文科学分野を背負うような立場になって、関口先生ならばどのように考え、どのような対策を講じるだろうか、と、お好きだった温泉旅行にまたご一緒して、露天風呂に入りながらゆっくり語り合いたい。先生は今頃、どこの温泉に浸かってこの世の我々を見守ってくださっているのだろうか。

厚みのある思索者

明治大学・政治経済学部教授　大森　正之

関口ゼミへの2013年秋の「道場破り」は見事な失敗だった。ハンナ・アレントの『人間の条件』の輪読の終盤、同行した私のゼミの女子学生は「私、こうした授業が受けたかった」とのたまった。ゼミ参加者には長老の山田元紀氏他OB/OG、そして真剣な報告者。眠たそうなものはいない。関口和男先生とは、私のかつての草野球チームメイト四戸純市さん（先生の中高の同級生）の紹介で邂逅し、先生にそそのかされて「道場破り」に打って出た次第である。かの女子学生は、明大･政経の私のゼミで温暖化対策として「中小ビルの屋上緑化の評価･認定制度」の研究に4人グループで取り組んでいた。人間と環境の問題を学生と共に思索する先生のスタイル。ともかく両者の矛盾に何らかの処方箋を考えさせたい私のスタイル。身体のスタイルは似ていても、中身は大違い。何度か酒席を共にしたが、酔うほどに幾重にも折りたたまれた思考の蓄積から、言葉がほとばしる。先生に教室と居酒屋で教えられた学生諸君は幸せだと思う。ゼミはこの二つの場所で行われた、と聞く。先生は本当に学ぶ者が好きなんだと思う。私は現在、大学1・2年を対象とした教養ゼミも担当している。彼ら彼女らを、残念ながら酒席に誘えない。

そういえば私も大学1・2年次に、輪読形式のゼミを取り、ヘーゲル哲学者の渋谷勝久先生とマックス・ウェーバーの『法社会学』を読んだ。というより、眺めた記憶がよみがえった。ゼミの後、何度か先生のご自宅に酒好きが招かれ、一切飲まない先生を囲み、お歳暮で送られた高級ウィスキーの処分を任された。哲学の話は一切なし。ドイツ留学中に奥様と知り合った経緯など下世話な話で勝手に盛り上がっていた。先生はパイプをくゆらし、私たちのバカ話の聞き役を楽しんでいたように思う。その後、私が結婚相手を連れて先生をお訪ねした際には、「本当にこんな男でいいの」と真顔で言ってのけた。痩身の渋谷先生と骨太肉厚の関口先生だが、何処か共通する。おそらく若くからドイツ哲学に取り組み、難解な文章と格闘した。人間とは、自然とは、歴史とは、と哲学者に語りかけ、常に暫

定的な答えを模索し、それに満足せず思考を深めていく。厚みのある思索家。アレントの輪読ゼミ以来、関口先生の印象は今も変わらない。飯田橋で飲んだ帰り、総武線の中で先生が低音で語る人間と環境への根源的な問いかけ。課題にはまだ、答えられていない。

「関口先生／ゼミの思い出」

中川　宗人

関口ゼミには、ゼミが履修できるようになってからすぐに登録し、卒業までずっと参加していました。当時の人環は確か定員の半数近くを社会人学生が占めており、夕方からの時間帯に配置されていた関口ゼミの参加者は、様々なキャリアをもつ社会人学生の方が多かったと思います。ゼミに入ったばかりの頃は、同学年の現役学生は私一人でした。

それでも居心地が悪いとか心細いと感じたことはありませんでした。関口先生は全ての人の意見や質問に対して真摯に柔軟に、時には笑いも交えて返答しており、そんなゼミでの時間はとても楽しいものでした。今思うと私自身ずいぶんナイーブな発言や態度をしていたと思いますが、先生やゼミ生の方々は茶化したりバカにしたりすることなく話を聞いてくれました。学部時代を楽しく過ごせたのは、関口先生とゼミのおかげです。

大学院に進学したいと相談したときも、暖かく応援してくれました。まだ大学院がとても狭き門だった世代である先生からすれば、ずいぶん頼りない、知的「足腰」の弱い学生に見えたと思います。それでも院浪人中にも気軽にゼミに出席させてもらえたことで、ずいぶん励みになりました。その後は修士課程での奨学金申請のための推薦書作成をお願いしにいったときが、直接お会いした最後になってしまいました。

最後に連絡をとったのは、修士を終えて博士課程に進学が決まった 2010 年の春だったと思います。日本で人文社会系の博士課程に進むことは、研究職以外の

進路を断つ片道切符に近い面がまだあります。当時もぼんやりと覚悟を決めるつもりで、先生に「博士に進むことになりました」と報告のメールを出しました。

そのとき念頭にあったのは、先生が挨拶の機会でよく仰っていた「品のある学問をしろ」という言葉でした。意味は大してわかっていませんでしたが、「あの言葉を忘れないように頑張りたいです」といったようなことを送ったと思います。それに対する先生のお返事は、大学院でもアルバイトの場でも、どんな場でも真剣に過ごして欲しい、そこで出会う人と真面目に向き合って欲しいという内容でした。とにかく「人を大切にしてください」と。

いま博士課程を終えて、複数の大学での非常勤講師や調査研究など、様々な形で人との付き合いが広がってきたなかで、先生の仰ったことの重みや大切さを改めて実感しています。研究もただ文献を読むだけではなく、様々な人との対話を通じた実践でもあります。もう直接お聞きすることはできなくなってしまったけれども、そういう個別の場面での真剣さが、「品」の意味の一部なのかもしれないと、今は考えています。

「芯のある人間に」

雨宮　萌果

「あっ、見つけた。この人は間違いなく人生の師だ。」

2007年の秋。関口先生の授業を半年ほど受けて、ふと心の声として沸いてきました。

関口先生の魅力、それはどんな人間をも受け止めて、その人の存在をまっすぐに見つめること。時代を超え、世代を超え、常に今の私たちの身になって話してくださいました。例えそれがハンナ・アレントであろうとブッダであろうと、先生の手にかかれば、私たちの教室でまるで当人が語りかけているかのようにさえ感じました。もちろん授業はけして易しいものではありませんでしたが、なぜか先生の言葉は魂に響くものばかり。私は在学時、先生の印象的な言葉は「関口語

録」として、ノートに記していました。久しぶりにそのノートを開いたのですが、やはり先生はいつでも私に語りかけてくれます。今回は、その語録の中のひとつをご紹介します。2011 年 3 月、卒業式のときに頂いた言葉です。

【私は常々「いい男になりなさい、いい女になりなさい」と皆さんに言ってきました。それは最近 TV でやたらと流れている CM に見られるように、けして「やさしい人思いやりのある人になれ」という意味ではありません。やさしさや思いやりはいわば人為です。装うことができるものです。懐中電灯と蝋燭のともし火の違いです。前者は何かを照らすもの。そのためのものにしかすぎません。対象がいつもあるのです。しかし蝋燭のともし火は照らすだけではありません。温かいのです。どんなに照度が低かろうが、そのともし火の温かさゆえに人が周りに集まるのです。なぜ温かいのでしょう。それは蝋燭のともし火には一番大切なもの芯があるからです。それは照らし出す特定の対象を持ちません。それゆえにすべてを照らし出すことができるのです。自分の人生において決して許せないたった一つのこと、これが自分の人生行路の芯なのかもしれまれません。皆さんに紹介したことのある本の中で《小林秀雄は実朝の歌“箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄るみゆ”を「大変悲しい歌」だと評しています。》この言葉が本当に心の中にすっぽり落ち込んだ時、皆さんは一本の蝋燭となっているのです。これからも皆さんと共に歩んでいきたいと思っています。

2011 年 3 月 23 日関口和男】

私は未だに、この言葉が心に落としこめていません。まだまだ人生の課題と向き合っている途中です。これからも人を温かく包み込む 1 本の芯になれるように生きたいと思います。先生の言葉たちは私の灯油となって今もゆらゆら笑っています。

「関口先生は「見本の大人」」

伊藤　　拓

私にとって、関口先生と言えば、どこまでも「大人」であったという印象です。
自分自身が大人になるに従って、改めてそう感じることが多くなりました。

○関口先生と「ミズミド」

私にとって、関口先生と切っても切れないのが、「ミズミド」＝「水と緑フォーラム HOSEI です」。

ミズミドは、奥多摩のフィールドスタディから始まった団体です。

フィールドスタディの夜に羽目を外した私達は、宿泊した翌日、施設の方々に注意されるまで、皆さんに迷惑をかけたことにすら気づいていませんでした。

その経験から「何か自分たちに出来ることはないか」と、「間伐材プロジェクト K」という団体を立ち上げました。

活動を行う内に、間伐材だけの問題ではないことを知り、ミズミドへと変わっていきます。

ミズミドは、立ち上げ翌年に人間環境学部主催のシンポジウムを開き、各ステークホルダーを集め、奥多摩という“都内の水源の一部”に起こっている現状を問題提起として投げかけました。

また、ミズミドの活動から派生した神奈川県立城山高等学校様での出張授業は、その後独立した活動として継続しました。

「10 年続けば一つの動き」という言葉を胸に続いたミズミドですが、ちょうど 10 年間をもって今はその幕を閉じています。

○ミズミドへの思い

ミズミドは、私にとって「徹底的に議論していい場」として非常に居心地が良い場所でした。

また、当時は団体の副代表として、シンポジウムの脚本を始め、やりがいのあ

る役割を担当していました。

充実感が溢れる毎日の一方で、ほぼ同時期に私自身が立ち上げた団体は鳴かず飛ばず。

寂しい気持ちもありましたが、今はその原因がよく分かります。

ミズミドには、関口先生を始め、他の先生方や社会人学生の方々、多くの「大人」が関わっていました。

だからこそ、シンポジウムがあそこまで大きな成功につながったのだと確信しています。

そう考えると、シンポジウムの翌年（私の卒業後）、関口先生を始め、多くの「大人」との関係を一時的に絶ったことが活動停滞の一員なのかもしれません。

○関口先生からの呼びかけ

もう一つ、最近よく思い出すのは、関口先生の呼びかけ方です。

私が思い出す関口先生はいつも笑っていました。

そして、いつもこう呼びかけてくれます、「絶好調だな！」と。

私は、現在、マインドや投資を中心とした、ライター・セミナー業をやっています。

マインドでポイントとしているのは、「事象ではなく、先に気持ちから入ること」です。

「楽しいから笑う」ではなく、「楽しそうに笑っているから、楽しいことが起こる」というものです。

関口先生は、確実にこうしたことを分かっていた上で、いつも難しい顔をしている私に呼びかけてくれたのでしょう。

思い返すと、相当広い分野でかなり詳しいところまで理解されていたはずですが、それをひけらかすようなことは、私の知る限りありませんでした。

もちろん、伺った際には丁寧に教えていただきましたが、本質的には「人に教える」ことよりも、知識をトコトン学び、しっかりと実践していく。

正に「知を愛す」＝「フォロソフィ（哲学）」の人だったのだと思います。

教わったことはたくさんありますが、常に相手との関係を踏まえて、適切な接し方をされていた関口先生は、私にとってこの先も「見本の大人」です。

当時から、心配ばかりかけてしまっていた私ですが、少しでも安心して見守ってもらえように、これからも頑張りたいと思います。

「神楽坂でお会いしましょう」

片柳　和香

「先生、私はしっかり生きてます。」

市川市内の女子高で非常勤講師として勤務を始め、7年が経ちました。それまでのキャリアを捨てての決断は私にとっての大きなものでしたが、不思議なほどに迷いはありませんでした。それに先立ち、20年以上にわたり勤務した企業を退職し、久々にお目にかかった時も先生は「和香ちゃん、いい顔になったね。この前は顔つきが違ったからね。」とおっしゃってくれました。その一言がどんなに私を勇気づけ、これから先に待ち受ける得体のしれない世界への不安を払拭してくれたことか。

節目となる大きな決断をするとき、必ず、関口先生の顔を思い浮かべる自分がいました。先生にアドバイスを求めるわけではなく結果を報告するだけだったのですが、それなのに「先生の一言で、自分で決めたことに自信を持ちたい」という小学生のような自分がいるのです。先生に恥ずかしくない教え子でいること。それが、今の私が日々を過ごすうえでの行動基準となっています。

先生の訃報に接して後、ときに自分の周りに先生の気配を感じます。うまく表現できないのですが、自分の良心のようなものの一部に先生が存在しているのだと思います。生徒たちの前で授業をするときのスタイルは、関口先生譲りの自信があります。導入部では軽い世間話やニュースでウォーミングアップ、時に鋭くあえて批判的な意見をはさみ、生徒が自分自身で考えてくれることを促すよう努める。すべて、先生から学んだことです。

関口ゼミや宗教論の授業を終えた金曜の夜は、神楽坂の居酒屋に繰り出すのが習慣でしたね。大学の先生とこんな親しげにお酒を酌み交わしてよいものかと、当初は困惑したものです。いつの間にか当然の流れとなり、幹事役となり、そのうちに宗教法人を買収して「ぽっくり寺ビジネス」を展開する算段まで始めたものでした。「先生、私は半分本気でしたよ。」

飯田橋駅や神楽坂で似たようなロマンスグレーを見かけると、「先生！」と呼びかけそうになる自分がいます。たぶん、「先生はもういない」ということが完全には理解できていないのですね。だから、たまには俗世間の喧騒を眺めにくる先生が、人間の姿形になって現れているのだと思うようにしています。一人飲みの夜は、ビールグラスを掲げて先生と乾杯して近況報告をするようになりました。先生、本当はまだまだお元気でご活躍ではないかしら。「先生、また神楽坂でお会いしましょう。」

「追悼」

川崎　陽子

「追悼」の言葉から関口先生を思う時、敬い、感謝、一言で「恩」の言葉を思い起こします。 お金では変えられないもの、損得の計算では生まれないこと、その一言で言える「恩」を詳らかに思い返してみました。

昨今、これだけ払っているのだから、払った分に見合うだけもらって当たり前。授業料が高いのだからちゃんと教えて。学んでいるのは自分なのに、いつのまにか教える人任せ、筋違いな話しです。「恩」の中に、敬い、感謝の念はあっても「等価交換」、売り買いの論理はありません。払った分だけもらう、そして見返りがなければ訴える。合理的です。ただそれは「恩」とはほど遠く、学ぼうとする姿でもありません。

さて、関口先生のゼミには、卒業生ということだけで長年在籍させてもらいました。先生の授業は専門分野のみならず、学びの地図が多岐に渡っていました。

哲学はもちろん、歴史、思想、地理を、古代、中世、近代、現代にわたり、ひろびろとした展望の中で、「私は〇〇が解らない」、「〇〇を知りたい」といった具体的なモチベーションへと繋げていけました。そこから学びを広げていくのは自分の仕事だと思っています。

学ぶ者として知識のストックの量産も重要ですが、より重要なことは先生の示した俯瞰的な視座から、今ここにいる私と幅広い地図の中の私の両方が見える自身を知ることと思います。関口先生から学んだことは、前述したような自分の立ち位置を知り、私はどこに行こうとして、何をしていくのかを問い続けること、それは卒業後も、そして生涯に続く学習意欲を持てたことです。

また関口先生のゼミは、年齢の違いを越え、特定のジャンルに話が集中することなく、はたち前後の学生の話題の中に戦中、戦後、団塊世代、安保闘争といった世代を越えた話題も盛り沢山であったことが特徴でした。その時代を越えたそれぞれの実体験の話し合いは、私の無知を知り違いを認識し、今持っている知識や情報の整理仕直し作業でした。

年老いた私が若い学生の中で心置き無く話ができたことに心から感謝します。

人がお互いの意見を出し合う時、いつでも自分を理解してくれるわけではありません。同世代の人でさえ楽しく会話ができるとも限りません。話が噛み合わない、どうも癇にさわるという人もいれば、人が何を考えているのか解らない、人も私が何を考えているのか解りません。強い人に弱い人、老いた人、若い人、助けられ助ける人がいる、それが人の営みです。その中で世代を越え違いを越えて共に生きていこうと力を尽すことは、生きる者、生き延びていこうとする者の希望につながります。

私はこうした諸々をゼミから感じました。この経験はお金で買えるものではありません。

ただ「恩」を感じます。

謹んで恩師関口先生への追悼と感謝の言葉を申し上げ、関わってくださった皆様に御礼申し上げます。

「関口先生のお話について」

久野　来羽

関口和男先生は大事なことは何度も繰り返し伝える先生でした。彼は当時「宗教論」という授業を担当しておられ、私が初めて彼の授業を受けたのもその宗教論でした。

その授業内で、また基礎研究の授業の場で度々話していた「商人とラクダの話」がとても印象に残っています。

「商人はラクダを引っ張り、池まで連れて行くことはできる。そしてその口を水面に漬けてやることもできる。しかし最後にゴクンと一飲みするかどうかは結局ラクダ次第なんだ」という内容の話でした。これは即ち教授である先生と受講生たちの関係を表したものであり、教授がいかに理解を助けることをしても最後には生徒自身の努力がなければ理解はできない、という趣旨の話です。

そのある種突き放すような話の通り彼は理解しようとしない生徒には厳しかったものの、質問する生徒や興味を持って話を聞く生徒に対しては必ず正面から臨んでいました。ある時、地球温暖化について先生と真逆の意見を持つ生徒が授業後に話をしに行くのを目撃しました。それに対して、先生はあくまで冷静に、少し楽しげに討論をしていたのを思い出します。人の意見を鵜呑みにしすぎるな、とも常々言っていた先生にとっては自分の意見に反対する生徒もむしろ嬉しかったのでしょう。

研究会の生徒に対しては、よく「君たちを立派な大人にします」と話していました。その為に難易度の高い書を研究し、最近のニュースについて目を向けさせ、自らの考えを発表させることを大事にされていました。

研究会が終わったあとの飲み会などの場でも、立派な大人としての振る舞いを教えてくれました。彼はただ単に勉強ができることを大人と呼んでいるのではなく、広い視野で物を見て、礼節があり人に気を使える人間をそう呼んでいるようでした。しかし実際のところ、大人かどうか、という判断基準はすべて先生次第でした。その為、私が彼の言うような大人になれたのかの答え合わせはできずじ

まいとなってしまいました。

こうして追悼の文を作成するにあたって、先生の話した内容やその言葉を思い出すのはとても簡単でした。それだけ何度も繰り返し伝えられた言葉が印象に残っていたのでしょう。いつでも思い出せる数々の教えを頂いたことに感謝を捧げ、関口和男先生に心からご冥福をお祈り申し上げます。

「静かに耐え、考え続けること」

窪田　早紀

虐げられて、虐げられて。

ゼミの時間でしたか、関口先生が、永山則夫元死刑囚について触れられたことがありました。

救いようのない悲惨な環境の中で、虐げられて育った後、「連続ピストル射殺事件」を引き起こし、4人もの犠牲者を出して死刑を言い渡された永山。その際の判決理由にあった、「同じ条件下で育った他の兄たちは、概ね普通の市民生活を送っている」

この意味を、考えてみてほしい。

噛み締めるように、頷くように、静かに問いかける先生の姿が、何故か強く記憶に残り、卒業後20年近く経った今も時折思い出すことがあります。

実際、他の兄弟たちも、決して普通の生活を全うしたとは言い難いようですが、それでもやはり、他の兄弟たちは、人を殺しては、いない。

私は、永山死刑囚その人の不遇な人生を想う以上に、同じくその受け入れ難い境遇に晒されながら、時に耐えられなくなりながらも、耐え、乗り越えることなど出来ないながらも、乗り越えようと蹠き、結果的には、その苦しすぎる境遇に潰されてしまったかもしれないけれど、でも、人は殺さなかった、その何人かの兄弟たちの苦しみ、痛み、悲しみを想いました。

ふと、自身を振り返ってみると、たまたま生まれ落ちた国は戦争もしておらず、さほど貧困もなく、家には親が揃っていて、姉は優しかった。非常に「楽」な境遇であったと考えるべきだと思います。そして歳をとり、やがて人並の「苦」にも遭遇したりもする。そして嘆いたりもする。

けれど、冷静に考えみれば、たまたまそれまでが「楽」であったのと全く同様に、「苦」もまた全くの自然として訪れ、そこには何ら規則性もないでしょうし、何の因果もないのだと思います。

人が生きることも、野の花が可愛らしく咲いていることも、大きな違いはないように思います。人が生きることに限って、特別な使命や、壮大な意味があることもないでしょうし、自身に訪れた困難が、何者かから与えられた試練であったり、あらかじめ意味を持っている訳でもない。ただただ自然なこととして流れている。

けれど、そんな自然の中で、人は喜びも、悲しみも、苦しみも見出して、向き合い、付き合っていかなくてはならない。

とりわけ苦しい時、悲しい時、時に意味を持たせ、時に信仰を拠り所とし、考え得る、あらゆる手段、創意工夫を凝らしながら、辛抱強く耐え、受け入れていく。

もしも、結果的に、良くはなかったとしても、

蹉き苦しみ、耐えながら、抗おうとする姿が、とても自然な姿なのではないかなと思います。

そしてまた、そんな姿は、たまたま「楽」な持ち回りを気楽に暮らす人の姿よりも時に健全で、深く温かく、優しくもなり得るのではと思うと、また幾らかの勇気を見出し、静かな光を感じられるようにも思います。

以前読んだ本の中に、あるイラストレーターについての話がありました※。

厳格なカトリック教育のもと、暴力的な母親から絶えず不安と恐怖を駆り立てられながら子ども時代を過ごしたけれど、その恐ろしい経験を、ものを創造することで克服したという話。

彼は、忘れてしまいたい子ども時代を、単に忘れるのではなくて、「加工、処理」することを選んだ。そうすることで、子供時代の不安と恐怖を、強さに変換する

ことに成功しているのだと。

自分の過去や人生を物語る時、犠牲者として、怒りに満ちた告発の目で振り返るのか、そうではなく、果敢にも、視野を広げ、別の局面や影響も配慮した成功の物語として扱うのか。又は何を取捨選択するのか、それは全て、自身の手の中にあるのだと。

私はやはり、永山ではなく、このイラストレーターでありたい。たとえそこまで見事なサクセスストーリーでなかったとしても、例えば永山の兄弟たちでありたい。

成功しなかったとしても、人より幸せじゃなかったとしても、人は殺さなかった、そちら寄りでありたい。

少しでもより良く、少しでもより正しく。

絶え難い困難に巡り会った時、足りない頭を駆使して、あちらからこちらから視点を変えて、

時に項垂れ、時には閃き、力み過ぎては道を誤り、それでもまた立ち止まって、辛抱強く、忍耐強く、静かに考え続ける体力と気力。

面倒くさがらず、投げやりにならず、強く静かに、考えることの出来る人間であることに、怠慢になってはいけないよ。

さあ、頑張りなさい。

そんな風に、先生が温かく応援してくれている、そんなことを日々感じたりしています。

※＜傷つきやすい子ども＞という神話 トラウマを超えて
ウルズラ・ヌーバー著 丘沢静也 訳

「関口先生を偲んで」

小林　淳一

関口先生に初めてお会いしたのは 2011 年 10 月です。友人に関口ゼミを紹介してもらったことがきっかけです。彼は難しい本を読むゼミがあると話していました。当時私は芝浦工業大学大学院に在籍し、物理学を学んでいました。興味本位で関口先生のゼミに出席したにも関わらず、関口先生は私をゼミに受け入れてくださいました。それから 2 年以上、ほとんど欠席することなくゼミに参加しました。

ハンナ・アーレント著『人間の条件』を精読するゼミでは、私のそれまでの人生でほとんど関わらなかった哲学や古代ギリシアの事柄が多く登場しました。初めて知ることが多く、大変刺激的でした。例えば、p.299 に差し掛かった 2011 年 11 月 11 日のゼミでは、「歴史は事実を関連付けて意味を持たせることだ。」という先生のお話がありました。それまでは歴史という言葉について深く考えたことなどなく、漠然と、歴史とは実際に起きた事実の客観的記録だと考えていました。しかし、ゼミで交わされた議論の中でそのような客観的記録は作れないだろうということになり、確かにそうだと思って歴史は物語なのだなと思ったことを覚えています。

関口先生は常々、「歴史を勉強しなさい。」とおっしゃっていました。私は前述のように歴史という言葉について深く考えていなかったものの、興味があることについての歴史の本を読むことが好きでした。（その歴史の本の物語性によって興味が湧いて、読み続けられたのかもしれません。）しかし、関口先生のゼミに出席してさらに歴史に興味が向くようになったと思います。また、関口先生はゼミでよく第二次世界大戦のお話もされました。今、私は第二次世界大戦中にドイツの都市ドレスデンに行われた爆撃について調べているのですが、これは関口先生の影響かもしれません。

また、関口ゼミでは沢山の仲間と知り合う事もできました。最近読んで面白かった本の情報交換等、有意義なやりとりができます。

関口先生、このような素晴らしいゼミに受け入れてくださってありがとうございました。

「今もなお、問われている」

坂井　彩美

平成最後の、という言葉をやたら見かけたが、小学生でミレニアムを経験した世代からすると、終末感は大分薄かったように思う。それでもオウム真理教事件死刑囚の刑執行には、ひとつの時代の終わりを感じた。

関口先生が講義で使ったオウム年表を取り出して、事件の経過を改めて追った。今夏もオウムについて様々な報道が出たが、この年表以上の新しい情報はほとんど見かけず、いかに先生がこの事件を重く見て、真剣にとらえようとされていたのかを改めて知ることとなった。

関口ゼミの後の飲み会でときどき交わされた冗談のひとつに、「関口先生は宗教家になれる」というのがあった。先生ご自身は笑って流していらしたが、ある飲み会の帰りに呟いていた「俺のところに集まってくる、あいつらはどうしたら幸せになれるんだろうな」という言葉が、今も忘れられない。先生のもとには学内に留まらず、他大学からも多くの学生達が、亡くなる直前まで集っていた。

関口先生は、学生達にあらゆることを問い続けた。近年では講義中に泣き出す女子学生もいたという、迫力ある講義を鮮明に記憶されている方も多いことだろう。疑問を持たないことを叱られる、ということに衝撃を覚えた学生は、少なくなかったのではないか。

それでいて、語られる言葉は注意深くひたすらに謙虚だった。つぎはぎの宗教知識で誰もが答えられなかった疑問に応え、エリート達を心酔させていったという麻原彰晃を、先生は明確に否定していらした。生き方をもってご自身の主張を貫かれていたと、私は思う。

あの夜の関口先生からの言葉を、残された宿題のようにずっと考えている。それに対する答えのひとつとして、こうして筆を執る機会をいただいたのかもしれない。先生は学生達の幸せを心から願っていた、教えを受けた皆様に改めてそれが伝われば幸いである。

正直なところ今でも実感というものはなく、皆で飲んでいると先生がひょっこ

り現れるのではないかと思ってしまう。しかし私はそろそろ、形見分けでいただいた本を読むことを、自分に許そうと思う。平成が終わってしまうその前に、新しい時代を生きていくために。

「宝」

鮫島　啓佑

先生からはたくさんの勇気をもらいました。

大変お世話になったと月並みな表現を如何なものだろうかと考えさせられるほどに、ここで会ったが百年目と言われた衝撃を思い出します。先生はまた、私の人生において重要なヒントをたくさん残してくれた稀有な人です。私は覚えている限りで受け取った言葉を反芻しては手探りの人生を灯す光として麦また麦の長い旅路を進むのであります。

誠に勝手ながら、この機会に私が人生の旅の中で先生から頂いた言葉を反芻し消化しそうにある言葉をご紹介します。（これは大した栄養でしたよという言葉たちです。）それが先生を偲ぶことになれば幸いです。

さて、世間知らずの学生が社会に飛び出すと様々な壁に当たることでしょう。犬でさえ歩けば棒にあたるというではありませんか。私が労働者として逆境に立たされたときに、先生に相談して帰ってきた手紙にはキケロの引用がありました。冗談で話をキケロとおっしゃるのか、二十代の私は真剣に悩みましたが、その時ばかりは文面どおり心意気を受け取ることにしました。「キケロの言葉です～自分の運命を呪うだけの者は、運命の女神に鼻先を掴まれて一生振り回される。運命に立ち向かう者だけを女神はハナカザリをもって祝福する。～」自分を中心とするナルシストたちが悩み嘆く理不尽な世界から少しでも抜け出す手掛かりとして、この言葉をポケットに入れて進む決意をしました。今の時代はポケットに文字が入るのです。あなたの人生を生きてください。と若者の背中を押してくれたと受け止めております、先生あの時はありがとう。

私が学生時代に卒論の相談をしに教授室を尋ねたときには、今からでは卒論など間に合わない、だから君は忘年会の幹事をちゃんとやれと、現実的な意見でいつも寝ぼけた青年の目を覚ましてくれていました。アフターフォローとして「ケセラセラでいきましょう。(中略)雨の日ばかりではありません、今日のような清々しい日が必ず来るものです。」と悩める学生を優しく忘年会に導いてくれました。私は人生で初めてオモテウラのない、一貫性のある先生に出会えてうれしかった。そうした出会いが私には宝なのです。重ねて、申し上げます。先生ありがとう。

なんだ、そんなこと言ってもう話を締めにしようじゃないかと思っているでしょう。

人間がやっと平穏や幸せを掴んだときに背後から変化は訪れます。盛者必衰のなんとかです。始まったことは終わりがありますし、終わるとそこからまた何か始まるものです。

無常ですね、つらいけれど。そんな時は先生がこう言っていたのを思い出して前向きに、ひたむきにまた一歩前に踏み出すのです、

「きみたち、これがどういう意味かわかる？百尺竿頭なほ一歩すすめ」と。

「もし関口先生が教授にならなかったら。」

菅原　和利

「関口先生はもし教授にならなかったら何になりたかったですか？」「俺か？革命家だ！」意志がある強い口調で先生はこう言い切った。ゼミの後のお酒の席。いつもの“善い加減”な調子で。当時の私は「先生らしいなあ」と思ったことを今でも鮮明に覚えている。

先生は言葉で人を巻き込み、人の心の奥深くに眠っている Atman（梵語で“本当の自分”）に火を灯す達人だった。その先生の言葉に多くの人たちが影響（扇動？）され、人生の重要な意思決定の場面には、先生の顔を思い浮かべる人も多いだろう。何を隠そう、私もその一人である。

私は先生がフィールドスタディを行った東京都西多摩郡奥多摩町で卒業後に事業を興した。理由はフィールドスタディがきっかけで設立された学生団体である水と緑フォーラム･HOSEIで、これから自分が生きていく上での“問い”に出会ってしまったからだ。それは“本当の豊かさとは何か”という問いである。何不自由なく生きることができるこの時代。しかし、人の心はいつまでも満たされず、欲望の再生産はとどまることを知らない。その中心地ともいえる東京において、私は奥多摩町の東京でありながら自然と共生する山里の営みに触れ、この問いに強く引き付けられてしまったのである。

人生の問いに出会ってしまうと、それは非常に厄介なもので行動せずにはいられなくなるのである。気づけば、卒業前に奥多摩町へ移住し、会社を興す準備を始めてしまっていた。その後は実際に株式会社を起業したものの、事業が軌道に乗る前に家庭の事情で事業を途中で止めて、一度は問いに向き合うことを諦め、現実社会の荒波の中でこの問いとは程遠いビジネスだけの世界に身を染めた。しかし、不思議な縁で私はまた奥多摩町に戻り、大学時代にインターンシップをしていた会社の子会社がつくった新会社の事業立ち上げを行うことになった。人の縁、時の運が有機的に結びつき、線になってつながると、不思議なものであの時の試練は今この時のためにあるとさえ思えてくる。

改めて奥多摩の地で事業を再スタートする時に、私は自分の問いを少し編集した。それは“本当の価値とは何か”という問いである。事業家とは世の中に価値を生み出す人である。私は事業家として“本当の豊かさとは何か”という自らへの問いかけだけで終わらせるのではなく、モノやサービスなどを介して人が触れることができる価値として人々に還元していきたいと考えている。

人生の問いには一見､終わりがないように見えるが､実は答えはすぐそこにあった。それは関口先生がよく言っていた「絶対に譲れないものをもて」ということと同じ意味であるが､今では本当の豊かさとは“大切なものを大切にできること”そして、本当の価値とは“大切なものを見つけること”と定義できた。全ては生きとし生ける全ての人がAtmanの存在を認識し、自分の人生を生きることができる社会を理想としたい。“梵我一如”の思想である。関口先生から多くのことを学び、20歳で見つけた問いをようやく30歳で自分なりに解くことができたの

である。

さあ、これで次の段階に進めるな！と思うと、先生が私の心に現れる。「和よ、小利口にはなるなよ。自分の道をいけよ！」これは、事業を奥多摩で興すと先生に報告した時にかけられた激励の言葉だ。先生が点火した“革命の灯”を心に抱き、私は今も自分の道を突き進んでいる。そして、振り返ることなくこれからも道なき道を切り開きながら生きていこうと思う。

「先生、またいつか会いましょう。今度は、私の革命の話しを聞いてくださいね。」

「時速」

鈴木　絢子

関口先生、私は来年で30歳になります。

先生と出会ってからもう10年も経つんですね。

先生から教えてもらったのは勉強ではなく「学問」だったように思います。

先生は「勉強しなさい」とはいいませんでしたよね。

「考えなさい」「本を読みなさい」「発言しなさい」

考えること、考えるために知識を得ること、それを誰かと共有してさらに深めること。

性別、職業、出身・・・ばらばらの　それはそれは個性的な人たちが、先生を求めて集まり、さまざまな思考や考察を交じらせました。

うわべだけでない、喧嘩でもない、

あの一人一人がまだ短い人生の中から捻り出すような重くて熱い（時に暑苦しい）言葉のやりとりはなんだったのでしょうか。

あの時間は、本当に私にとっての奇跡でした。

「お酒なんか飲まない方が良い」

先生はそう言って、一人でも多くの学生がゼミの後　飲み会に来てくれることを心から望んでいました。
教壇を前にすると哲学を語っていた先生はアルコールを前にすると小学生でも笑うような下ネタを言って　無邪気に笑っていましたね。
飲み会では、さっきのあの熱いディベートはなんだったのかと思おうほどみんな馬鹿らしくて、笑ったり泣いたり歌ったり・・・

あ、今だから言いますけど、酔ってから始まる先生の説教はびっくりするくらいイマイチで　みんなピンと来ていなくて、でも先生が大好きだから「はい」「はい、すいませんでした」って調子を取っていただけなんですよ。

先生のゼミに入ってからでしょうか、私は「人間って愛しいな」と思うようになり、自分のことも相手のことも許せるようになりました。
「あと俺が 10 歳若かったら、お前を嫁さんにしてやっても良かった」

ゼミ旅行中の夜、先生がべろんべろんになった際、私に言った軽口です。
私はそんなことより先生がよろけて転倒しないか注意を払っていたので無視をしていました。
後から、その時私は 20 代前半、先生のご年齢から－ 10 しても・・・
という笑い話になりましたが、
今では、先生の持っている時速についてよく考えます。

背中を押してくれた回数、一緒に悩んで笑ってくれた時間、教えてくれた言葉の密度…

十分過ぎるほど与えられてきましたが、

先生、先生の速さに私達はまだ心が追いついていません。

「学生が、お前達が、大好きなんだ」

あのスクランブル交差点を抜けた私達はいまそれぞれの道を、それぞれの時速で進んでいます。
忙しさや社会の雑踏に自分が消えそうになることもありますが、本棚にあるニーチェの本を見ると、あの時の「自分」をがむしゃらに探し「自分」だけに夢中だった頃を思い出し、恥ずかしくて少し笑顔になります。

先生、あの本はもうしばらく借りていていいですよね？

「故関口先生の御言葉」

人間環境学部卒業　高田　琴子

この度は、私の大学生活と今後の人生に大きな影響を与えてくださった、故関口先生へ感謝を込め、今もなお、心の支えとなっている先生のお言葉を3つご紹介いたします。

「信頼は罪なりや」

太宰治の『人間失格』の中ででてくる印象的なこの問いに出会ったのは、私が関口ゼミに入った大学1年の秋でした。純粋無垢な信頼心を問題提起としてあげるその発想に、私は困惑し、何が自分にとっての美徳であるのか、自分とはどのような人間なのかを19歳にして悩んだことを思い出します。故関口先生は、いつもこう言います。「信頼することほど、容易いものはない。」と。信じて疑わないという純粋無垢さが如何に幼稚であり、この世の中を渡っていく中で、無防備

さを露呈するものであるということを、27歳になってひしひしと実感しています。先生の教えにこの先ずっと守られ、多くの決断の根源となることを私は19歳にして知るよしもなかっただろうと思います。

「なにか絶対に譲れないものをひとつだけ持ちなさい。後は全部捨ててもいいとおもうものを」

何か絶対に譲れないもの、譲れない軸。自分自身にとって芯のある生き方をという意味ではなく、最後に路頭に迷ってしまった時、自分の行く末を決断するときにハッと思いだし、これしかないと判断する、その道に行きなさいというのが本質であったのだろうと思います。人生で多くの決断が私たちを待っています。その決断ひとつひとつを突き付けられた時、人生の後悔を避け、わが道に行って欲しいという先生の願いを今になって思い出します。

「人は言動ではなく、行動で判断しなさい。」

言葉の力こそ、認めているものの、最後に人間の本質を本性を出すのは行動であるということです。現代社会における、人間関係ではどんな言葉を並べても、行動に伴っていないことはもちろん、自分自身が伝えたいという想いは行動によってあらわしていくという意識が如何に大切であるかを思い知りました。行動とは意思決定の表れだと、今になって思います。

先生の教えは、年を重ねれば重ねるほど解釈が一つではないこと、そしてどれも正しいことを伝えてくれています。まるで、一緒に歳をとる生物のように一つの概念が自分自身とともに成長する。故関口先生は私にとっても大きな財産を持たせて下さいました。

ご冥福を心よりお祈り申し上げるとともに、いつまでも先生の教えが自分の心を灯してくださっていることを、深く、深く、感謝申し上げます。

「「持続可能性」に抗う関口和男の思想」

武正　泰史

関口先生（以下、師とする）が亡くなり一年半が経つ。師と初めてお会いしたのは、大学一年生の時に何気なく履修した宗教論の授業のときであった。ずばずばと思ったことを指摘し、大学生だからこそ勉強し批判的に考えることの重要性を強く説く先生であった。その後、二年生になってから参加するゼミでもお世話になり、計三年間謦咳に接した。

ゼミでの師は、使用しているテキストの内容に留まらない内容を講義していた。自分が在籍していた当時は中でも、いわゆる「持続可能性（sustainability）」概念に対して考察・検討することを繰り返し呼びかけていた印象が強い。元々、自然環境問題が世界的な問題となっていく中で、「持続可能な開発（sustainable development）」を意味するものとして提案されたこの概念を、本来は経済学的なものであると師は考えていた。それが現在に至り、この概念の下で、環境問題解決に関わる活動・意識・実践が一括して語られるようになっていると師は認識していたようである。

そうした「持続可能性」概念が、環境活動全般における重要なモットーとして語られ、積極的に機能していくことに違和感を感じていたのではないだろうか。師の最後の論文「「持続可能性（Sustainability）」から「生存可能性（Survivability）」へ」の中でも、「持続可能性」概念が何を意味しているのか不明瞭なものであるため、様々な解釈が可能なことが指摘されている。すなわち、多義的であるため、この概念が具体的に何を意味するのか、共通の認識が生まれにくいと考えていた。それゆえ、活動に携わる関係者であっても、「持続可能性」概念の明確な説明ができていないことを指摘にする。そのことは、教育や社会政策に関わる活動であっても明確な説明をしなくていいように導いてしまう点、さらに経済的効用の面では、自由な解釈が可能なことから個々人の活動に好きなように用いられるということに警鐘を鳴らしたのである。

これらが「持続可能性」の多義性に起因することから、それに具体性を与える

ような上位概念を師は示すに至った。授業でも示唆し、上記の論文でも記されたその上位概念が、「生存可能性（survivability）」概念だった。つまり、「生存可能性」概念の下位の概念として、「持続可能性」概念を位置づけ、地域・地方を拠点として若者が生涯生活していくことを模索していく原理という形に定め、多義的な性質を安定させようとしたのである。「生存可能性」概念それ自体は、誕生から長い時間で大きな変化が起きている地球上で、人間は短期的に自然環境保護に向かうのではなく、種として存亡の危機に直面した時に生き残るよう模索していくことを目指す原理と考えていたようである。上記の論文で、大枠を示しただけと断りを入れながらも、「生存可能性」概念のもと、学問が統一的な知として機能する姿を思い描いていたこともうかがえる。

こうした議論を紡いだ師にとって、それだけ「持続可能性」概念の多義性が、向き合うべき考察の対象だったのだろう。今更ながらに思うのは、個々の議論の論点・批判に対してどう応答しただろうかということである（筆者の専門でいうと二つの概念と歴史学研究の関係などだろうか）。批判的に考えることを重要視していた師が、どういう答えを返してくれただろう。今となってはそれを知ることができないのは残念である。

「何故、人文学書の精読だったのか。－元ゼミ生の立場から－」

田中　慎太郎

関口和男先生は、ハンナ・アーレントの著書「人間の条件」を精読する研究会を行われていた。毎週の研究会での進捗は、平均して１～２ページ以下であり、仮に２年生の頃から研究会を履修していたとしても、１冊の本を読み終えるより先に卒業を迎えることとなる。このような研究会の方式に対して「何故、１冊の人文学書に多大な時間をかけるのだろうか」と疑問に思われる方も多いのではないかと思う。

そこで本稿では、卒業生の立場から「関口先生が研究会で目指されていた事は何だったのか」の短い考察を試みる。もちろん、本稿は関口先生ご本人のお考えを代弁するものでもなく、あくまで「2007 年から、2011 年に人間環境学部に在学していた、元ゼミ生の考察」に他ならない。本特集号を手に取られる方が、本稿と他の卒業生の投稿とを併せ、関口先生の教育活動や大学教育に対し、考えを深める一助として頂ければ幸いである。

1. 学問に対する態度

私たちは他者と議論をしたり、読書を通して自らの考えを深め、決断を繰り返すことで人生を歩んでいくが、物事を理解する過程で、無意識に様々な希釈や脚色を行う傾向がある。一例をあげると、親近感を持つ人間が発した意見に対しては、意見を正当化するような根拠が頭の中に浮かびやすくなる。その一方で、自分が持っている考えに反対する意見に対しては、単に意見に対して批判的であるだけでなく、その意見の発信者に対してもネガティブな属性を当てはめる傾向がある。これを「レッテル貼り」と批判する理知的な声も世の中には溢れているが、頭の中で行われるこのプロセスの大半は無意識的である為、他人の「レッテル貼り」や「論理の飛躍」を指摘する事は容易でも、自分がそのようなミスを犯している事に気づくのは困難である。つまり、自分の知見を広める為に議論や読書をしても、このような無意識の傾向のために、思考を深め、決断するのに不十分な経験しか出来ない事態が、頻繁に発生しているのである。

この私たちの厄介な傾向を最小限に留める対策として、『物事を自分勝手に解釈せず、物事そのものを理解しようと努める態度』を身につけることがあげられる。人文学書を精読する中で、私たちは自分にとって都合の良い部分だけを本から抽出するのではなく、自分が思いつきもしない複雑な考えや、自分の考えとは正反対の意見に対し、出来るだけ理解しようと努める態度が養われる。関口先生が研究会を通して「一冊の本を徹底的に精読する」という方針を貫徹されたのは、学生達がこのような学問に対する態度を身につけることを願ってのことではなかっただろうか。もちろん、このような学問に対する態度は人文学書の精読でなければ身につけることが出来ない訳ではなく、質的・量的な調査研究法や、自然科学の実験

を深く学ぶ中で身につけることも出来るだろう。しかし、共生と民主主義を「学びの特色」に含む人間環境学部において、政治哲学を題材に学問に対する態度を深める機会があったことは、掛け替えのないことだったのではないか。

2. 自由な空気と対話

関口先生の研究会での経験を振り返ってみると、政治哲学とは関係のない話題をしても許容される自由な雰囲気の場であった。その一方で、人間環境学部を卒業し社会人となった者の多くは、目上の人間や所属組織のしがらみの下にあり、自由に発言する機会に恵まれているとは言えないのではないだろうか。

私は、本稿を執筆する中で、社会人経験と大学で受けた教育を振り返り、「関口先生と学んだ時間は何であったのか」「自分が人間環境学部で学んだことは何であったのか」を深めることが出来た。勿論、本稿は一人の元ゼミ生の立場から述べたものに過ぎず、様々な限界点があるが、本稿が指し示すのは、多くの人間環境学部の卒業生が、社会人としての経験と学生時代の教育を咀嚼し、自由な雰囲気の元に、考えの重要性ではないだろうか。それがどのような形式のものとなるかは分からないが、関口先生の研究会がそうであったように、様々なしがらみから距離を置いて、「自由に、物事を理解しようと考えを深められる機会」が増えることを期待したい。

「関口先生を偲んで」

中村　俊也

関口先生との出会いは、1年生の前期の人間環境入門で、「環境とは何か」から翻り「何が環境なのか」を問う講義だった（と思う）。そこで私は先生（関口教）にまさしく感染した。ただ出来の悪い学生（信者）だったので、到底、学問的な成果などは記せない。ただ先生に学ばせてもらった、生きる態度（アティチュード）をここに記して、追悼文に代えたいと思う。

卒業後に社会に出てから感じることだが、先生のような方にはお目にかかれない。これは失礼な意味でなく、先生には日本社会にはない（ようにみえる）、当然の規範に実直だったからだ。それは、権利には義務が伴い、上に立つ者には立場と責務があり、自らの発言の自由を求めるのであれば、同時に他者からの批判受け入れることなどである。こうした姿勢を貫くのは属する共同体の中では大変に厳しいことではあるが、私の目に先生はやってのけていたと思う。それは先生が得た碩学的な知識である以上に、学生に対する愛情の表出だったと感じる。

先生と過ごした時間は講義、ゼミ、学生活動、宴会？と多岐にわたるが、一貫して感じたのは、学生に対しての愛情だ。これは先生からよく拝聴したが、先生の学部生時代は学生運動の時代で、ろくに大学で講義を受けたことがなかったようだ。私は当時どう過ごされていたか詳細は知らないが、先生は自らの学生生活を取り戻すかのように、学生だった私たちに接してくださったのかと思う。再び脚光を浴びるリベラルアーツが、一生学び続ける姿勢やそのための準備と解するならば、先生はまさにそれを体現して愛情をもって学生に対して接していたと思う。

また常に先生から意識させられたものに、学生がもつべき姿勢として、学生もまた社会の一部であり、社会と対峙した存在であるというものがある。学生活動おいては、上述の規範はもとより、この姿勢を常に問われた。この鍛錬は当時の私たちにとっては大変に険しいものだった。ただ社会と対峙することで、この社会の矛盾を捉え直し、自らがこの社会でどうありたいのかを自問し、学問に繋げようとする内発的な学びがそこにはあった。その濃密な時間を与えてくれたことに、ひたすら感謝である。

なんか堅苦しいことばかり書いてしまったが、関口先生に出会うことができ私の人生は本当に豊かになりました。結婚式での愛（アガペー）についての祝辞をいただいたのは一生の宝です。叶うものであるならば、また杯を酌み交わしたいです。先生ありがとうございました。大好きでした。安らかにお眠りください。

「人生の道標」

2002 年度人間環境学部入学　大田区産業経済部　西川　恭子

天敵だ！関口先生の第一印象は惨憺たるものであった。

人間環境学への招待、初っ端の授業で、オーストラリアでのカンガルーの話だったのだが、内容はここでは避けたい。それがいつしか、先生は私の人生の道標となっていったのだから、不思議である。

思い返してみると先生の熱烈なファンである友人からの影響が大きかったようだ。恐る恐る入ったゼミでは、毎回先生から飛び出す刺激的な話にぐいぐいと引き込まれていった。もちろん先生は一方的にお話をされるだけではなく私達から自分の言葉で、自分の考えで発言するよう促した。先生のお陰で自分自身が変わっていくことが楽しかったし、又、そんな魅力的な先生を取り囲む人達も一人一人違った魅力を放っていた。

宗教論の授業は時々教室を飛び出し、「さくら水産」での課外授業を行うなど、先生の存在は間違いなく私の大学生活を充実したものにした。卒業後も年に数回はお会いして悩みや愚痴を聞いてもらうだけで、バカバカしいことを気に病んでいたものだと気づかされる。

現役当時から先生の行事に参加していた夫は、定年後、法政大学に入学、ついに関口ゼミの門を叩いた。夫婦揃って関口ゼミは我々だけではないだろうか。夫は私が入っていた「人間の条件」を読む方のゼミではなかったが、英文を訳す手伝いをしていた私は再度先生のゼミに入ったようで嬉しかった。ただただ残念なのは、先生と一緒に卒業する約束だった夫の卒業式に先生はいないことだ。

しかし、友人は言う「先生は今日そばにいるね。」、そう、先生は私達の心の中に居続けて見守ってくれている。世の中で起こる様々な出来事、先生なら何て言うだろう、私はこう思うけどそれに対して先生はどうですかと問いかけてみる。私がハンナ・アレントの名を見かけ先生を思い出すとき、ゼミの先輩から LINE が入る。「先生ならこの本をきっと勧めるよ」と本の紹介、やはり先生はいるのだと強く実感する。

一時は、人生の道標を失くし、途方にくれていたけれど、今は返って近くに感じることが出来る。もしも今辛い思いを抱いている人がいたら、先生に話しかけてみてほしい、きっと応えてくれるはず。この先のそう長くはない人生、何があるか分からないけれど先生に対して恥ずかしくない生き方をしていきたい。先生を通じて大学で得たかけがえのない友人と共に言おう、「関口先生いつもありがとう。これからもよろしくお願いします。」と。

「関口先生の教え」

西川　志津雄

Bゼミで1年間（'16年度）先生の教えを受けた。

先生とは、大学を一緒に卒業、こんな幸せはないと考えていた。私は来年3月に卒業を迎える。先生は定年を迎えるはずだった。残念でならない。卒業してもずっと先生の教えを受けたいと考えていた。

先生が授業の時に話されたことを記したい。先生が目の前に帰ってくる。

ゼミでは、Sustainability（ALAN　HOLLAND）、Population（CLARK WOLF）を和訳した。

①オックスフォード大学の20歳の学生が、日本文学の敦盛を英訳している。将来は金融に就職するという。それを聞いた所ジョージが、「英訳は必要ない」と言った。

先生は、とんでもない！それだったら大原簿記学校に行けば良い。大学は素養を身に着けるため。英国人から、平家物語のどこが好きかと聞かれた時に、日本人なのに答えられない。本当に恥ずかしい状況となる。

②人生の中で、どんな人に出会うかが重要。素養が無いと、その出会いが生かされない。大学院時代に半年教わった年配の先生の教えが、今でも肥やしになっている。自分が会ってみたい、話してみたい人に短時間でも学べたことは非常に良かった。

③なぜ？何故？が必要。与えられたものを覚えるのは大学ではない！

④一人間であることの意識、尊厳を持つことが重要！それを学ぶこと！！

⑤いい加減なことはやるな！発表で自分が分かっていないことは発表するな！本当に勉強してきた人は違う。

⑥質問すること。議論すること。

⑦過去に無知なものは、将来を閉ざす。歴史を知らない人間は、将来を見通せない。

⑧ことの一面だけを見てはダメ。背景がある、そこも見ないとダメ。

⑨プライドを持つこと！自分の人生が見えてくる。

⑩自分のできることでボランティアをすると言う人がいた。傲慢である。できないことはしないということか。

⑪人の話、特に解説者の話を聞いてはダメ。自分で見る、聞く、判断すべき。「おかしいな」を知っていることが重要。

⑫難しいものは、書いて、整理して、考えてみること！分かるようになる。

⑬現状分析を徹底的にやらないと解は生まれない。

⑭読む本を選ぶこと、本が人を選ぶ。本があなたの中に入ってくる。

⑮日本史、世界史を読んでおくこと。言葉の量が増えるし、違った形の世界を見ることが出来る。

先生は、大学の先生らしい先生だった。嫁さんの恩師から、自分の恩師になってくれたのに。先生に短かったけれど教えを受けられたことが、私の財産である。

「関口先生と人生が交差した３年間」

林田　　実

関口先生と最初に出会ったのは、私が社会人編入試験を受けた時の面接官の１人であった。入学後に参加してみたいゼミの話になり、社会人としての時間の制

約からどうしても6限のゼミしか選択肢はなかった私は、面接官が関口先生とは知らずに6限の関口ゼミに興味があります、と言ってしまった事を覚えている。その後、間髪をいれず「関口は私です」と言うなり、ゼミの特徴はアーレントを読んで全員で「よく考えるゼミ」であることなどを説明していただいた事が懐かしい。

2013年4月に私は晴れて関口ゼミの一員になることができた。それから3年間、勤務先の配慮に助けられ社会人学生として仕事と勉強の両立を楽しむことができた。金曜日の6限のゼミを終えると、気のおけない仲間と近くの居酒屋でゼミの続きをするのがまた楽しみだった。社会人学生にとっては、若い学生と話したり、先生とお酒を酌み交わしながら政治、哲学などの話題を一言漏らすまいと聴いていた事を覚えている。

ある日先生に「気にいらねい事が一つある。あんたはもっと自分を出さなきゃダメだ。」とか、モンテーニュはこう言っている「私は私の意見を述べる。それがよい意見だからではなく、私自身の意見だからだ。」など、ズバッと目の覚める指摘を受けた事が忘れられない。

その後の仕事の中でどれだけ先生の「言葉」を反芻してきたかわからない。政治、外交、国防など、先生はどう考えるのだろうか、先生が指摘していたことはこういう事を言っていたのか、など日々の政治状況の中で考えさせられることばかりである。もっと多くの事を先生から吸収したかったし、日本を取り巻くさまざまな問題を論じてみたかった。

振り返ってみると、先生と私の人生が交差した3年余りは本当に貴重な時間であった。卒業後、仕事が多忙となり、ゼミに参加することは結局一度もできなかった事が悔やまれるが、何よりも先生がこんなにも早く逝ってしまうとは思いもよらなかった。

先生からいただいた手紙に「このようなご時世、つい自分を見失いがちで『自分に恥じない生き方』を貫くのは難しそうですが、どうか心身ともに健康に留意して、頑張ってください」とあった重く温かい言葉を改めて思い出す。

自分に恥じない生き方をするのは今の私にはまだ無理のようですが、呪文のように唱えながら日々の仕事に励んでいきたい。そして、我々をより良き方向に導いて下さい。天国でやすらかに眠っている場合じゃありませんよ、関口先生。

「関口先生の言葉」

2009 年卒　樋原　　亘

「人間の条件」、「仕事と労働」、「自省」、「お酒の場でこそ人の良し悪しが見えるもの。ちゃんと言わずに周りに配慮できる人間は、どこへ行ってもやっていける。」

「その人を知りたければ、相方（嫁さん）を見ろ。相方はその人の鏡だ。」

「道端のキツネに餌をあげるとき、その場の可愛いとかわいそうだけで自然と関わることが問題なんです。そのあと、栄養過多で生まれてきてしまった子ギツネがどうなるか考えられるか。私はそういうことを想像できるようにしなければならないと思っているんです。」

「つまるところ問題というのは、どの時代にも絶対にある。人間が直面する問題は多い。教育というのはそのような問題に対して、真摯に向き合い、考えられる人間を育てる。それが教育なんだよ。」

大学１年の春、キツネの話を聞き、漠然と感じていた目の前の霞がサラっと消えたような新鮮なイメージとワクワクする感覚がたまらなく楽しく、そんな先生

との出会いが本当に嬉しかった。先生のゼミに行こうと決め、それからの先生の授業と夜からの課外授業（飲み）は大学での重要な日課だった。当時はサークル活動も楽しく、必修の授業もサボるような私だったが、先生の言葉を聞きたくて、金曜 17 時からはどんな誘いがあってもゼミに参加していた。

先生を通して知る、世界の成り立ちが好きだった。とにかく先生の言葉が好きだった。どんな偉人の言葉よりも、私にとっては先生の言葉が金言であり、今後の私の軸になるのは先生の言葉だ。

だからこそもっとこの先、先生の言葉が聞きたかった。

結婚しました。自分が父親になります。親父が亡くなりました。仕事を辞めようか悩んでいる。そんな時、先生のもとに行き、「気まぐれで来るんじゃないよ」と怒られながらも、一杯行くかと言われながら、飯田橋に向かい、飲めない酒を私は飲みながら、先生の言葉を、先生の声でもっと聞きたかった。

“人は死ぬ”ということをここまで感じ、会いたいと思う人には思った時に会っておくべきなんだと強烈に感じ、それが先生の最後の教えになったことが悔しい。

「百尺竿頭に一歩進む」

先生が好きだと言っていた言葉を、自分も少しでも体現できるよう精進していきます。

改めてご指導頂きありがとうございました。また会う日まで。

「関口先生を偲んで」

伯耆原　匠

2017年3月9日の夕方、職場からの帰り際にふと見た関口ゼミLINEグループでの先輩からの連絡で私は関口先生の訃報に接しました。その現実を受け入れられないままなんとかアパートまで帰り、部屋に入った途端に崩れ落ちたことだけは覚えています。

新年度に入ったら有休をとって金曜夜のゼミで先生に会いに行こう、そんな悠長なことを考えていた矢先のことでした。

「バラバラ、お前は良い男になれよ。」

教授室で、ゼミ合宿で、飲み会の席で、先生は決まっていつも私にそうおっしゃっていました。先生に会って話したかったことを思うと、私をあだ名の「バラバラ」で呼ぶ先生のこの言葉が頭の中を木霊します。先生の言葉のその意味を思い、当時から今に至る自分の姿を顧みるに不甲斐無さばかり感じてしまいます。

入学直後の人間環境学部の講義で先生の講義が面白くて1年時に先生の宗教論と基礎演習を受講し、関口ゼミにはAゼミに2年～4年、Bゼミにも3年～4年の時に所属しました。2年生の途中からゼミ長になり、ゼミ合宿等の手配、映画「SHORE」の学内上映会の企画などで打ち合わせのために教授室に頻繁に出入りするようになりました。いつしかゼミ前の時限は先生の教授室で過ごすのが当たり前になり、そこで先生や井上奉生先生、山田元紀さんや他のゼミ生と一緒に世間話から真剣な議論まで様々なことを語り合うのが恒例になりました。その後、ゼミでは徹底的な討論をし、Aゼミのある金曜の夜はゼミ終了後に市ヶ谷の「酒当番」での「補講」に参加して先生や他のゼミ生と語り合う、ほぼ毎週のこのサイクルが関口ゼミに入ってから卒業までの3年間の私の学生生活の日常でした。

徹底的に討論することや語り合うことに重点を置いた関口ゼミの在り方や空気は

私の人生において唯一無二のものであり、とても知的で楽しい時間でありました。

それを作っていたのは間違いなく関口先生の存在であり、膨大な知識と併せ持った先生の人柄だからなせるものだったと先生が亡くなられた今、痛感しています。

私が卒業する頃、先生はよく「俺ももう数年で退官だからさ、そうしたら月1とかでOBで集まって今のゼミみたいなことをやろう。俺がそういう場を作るからさ。」とおっしゃっていました。先生ともっとお話ししたかった、「次がある」と思っていた自分への後悔と喪失感が今も胸を刺します。

だからこそ「お前は良い男になれよ。」という先生の言葉を胸に、いつか先生に胸を張ってその姿をご報告できるような人間となれるようこれからの人生を歩んで参ります。

「ともしび」

北條　　健

関口先生の言葉で心に残っているものはいくつかあるが、その中の一つに「ロウソクの灯と電光の違い」というような話がある。ロウソクの周りには人が集まるが、電光にはそれがない。このような作用は、ロウソクに芯があるからではないかというのである。関口先生は、日頃から、物事を批判的に見ることのできる力（鵜呑みにしないという意味で）が大切だとおっしゃっていたが、「芯がある」とはどういうことか、感覚的にわかった気がして妙に納得した。私は、関口ゼミとはこのロウソクに集う人々の共同体のようだと感じている。

このゼミの面白いところは、皆が共通のテーマや目的でつながっているわけではないというところだ。このゼミ（もちろん、今でも続く飲み会も含む）に集う人々は、年齢や立場、所属においてバラエティーに富んでいるが、特定のテーマを共有しているとは言えない。しかし、何かに惹きつけられて集っている。関口

先生の魅力もあるだろうし、自分なりの視点で社会を見たいという共通意識があるようにも思う。日々めまぐるしく過ぎていく中で、社会について「何か気になる（あるいは、ひっかかる）」という感じをもち、それは何なのかを知りたいという欲求がある人達の集まりなのではないだろうか。

私は、入学間もない頃、「人間環境学入門」という授業で様々な分野の先生方が講義する中で、関口先生の授業に強い衝撃を受け、以来関口先生を追いかけるように大学を過ごした。オフィスアワーに毎週のように通った時期もあった。今思えば、単に自分自身の悩み（それは身の回りの事ではなく、当時の自分としては社会的意義のある悩みのつもりだった。）に過ぎないような内容だったが、先生は、そうした一学生の話に対しても熱心かつ丁寧に対応してくださった。私は、社会で身を処していくためには一見無駄に思えるような事柄に膨大な時間を割いたが、それに付き合ってくださった関口先生のおかげで、今は、多少自分の拠り所というべきものが持てたような気がしている。

私にとっては、法政大学卒業生というよりは人間環境学部卒業生であり、さらに言えば、関口ゼミ卒業生というのが一番しっくりくる。今でも、ゼミの仲間は世代を超えてつながっており、それは日々生きる上で大きな力になっている。このような場をつくってくださった関口先生に改めて感謝するとともに、これからも「芯」の持つ力を感じながら生きていきたい。

「関口先生と出会いについて」

元村　麻美

出会いはいつ始まり、いつ別れが訪れるかわかりません。

私と関口先生との出会いは、大学1年生のとき、宗教学の授業でした。55年館か58年館の小さな教室。受講生はぽつぽつと10人前後でしたでしょうか。何をお話されたか忘れてしまいましたが、「面白い教授がいる」と感じたことははっきりと覚えています。1年生後期から始まる基礎ゼミでもお世話になり、そのま

ま２年生からＡゼミに参加。私は根っからの「関口門下生」でした。

さて、関口先生がきっかけで広がった、二つの出会いについてお話しします。

一つは、本との出会い。先生がおすすめした本に、塩野七生著「ローマ人の物語」がありました。ものは試しと手に取り、気づけば２巻、３巻、その先へと読み進めていました。歴史に苦手意識がありましたが、教科書のような単調な史実の羅列でなく、登場人物の思考や息遣いが感じられる「物語」として、楽しみながら読むことができたのです。そして大学２年生の春休み、「ローマ人の物語」読破までは遠かったものの、ローマへ旅行に。フォロ・ロマーノ、コロッセオなど、巡ったのは定番の観光地ではありましたが、ローマ人たちがこの地で“活動”していたのだと想像すると感慨深く、静かな感動を味わいました。この本を読んでいなければ、きっと「立派な遺跡だ」程度にしか思わなかったでしょう。先生のおかけで、読んだことのないジャンルの本に出会い、歴史の楽しみ方を知ることができました。

もう一つは、人との出会いです。ゼミの友人、仲間は言うまでもありませんが、今の職場でも先生のおかけで知り合った人がいます。先生が学部長を務めていた頃に声をかけていただき、保護者の皆さんの前で大学生活や就職活動について話をしたことがありました。帰り際に「もしかして〇〇に就職されるんですか？」と、声をかけてくださった女性がいました。「私、そこで働いているんです。」と。その方とは、入社後の配属先は違いましたが、何かとご縁があるように思います。新入生合宿の出発日にお会いし「がんばってくださいね！」と声をかけてくださったり、たまたま受けた電話で「お元気ですか？」と話をしたり。そして今年私が転勤し、その方と同じビルで働くこととなりました。数ある異動先の中で、一緒になるとは…。これも先生がくださった縁だと感じています。

私たちは出会った人やもので構築された、網の目のような関係の中で生きています。それはいつどのように変化するかわかりませんが、関係の中で互いに影響を与え、喜び、苦しみ、自分自身を意味づけています。いつかまた関口先生と出会ったとき「いい女になったなぁ」と言ってもらえるよう、いただいた出会いを大切にし、一歩一歩進んでいきます。

「関口ゼミ」

2013年卒　OG　山本　菜摘

「アイヒマンは、単に残虐な犯罪者だったのか？」
「オウム真理教はなぜ地下鉄サリン事件を起こすに至ったのか？」
「古代ギリシアやローマ人の民主主義とは…？現代日本の民主主義は…？」

政治、哲学、宗教、歴史。

およそ、日常生活ではタブー視されがちであり、しかし同時に考えるべき事柄や、問いがたくさんある。

関口ゼミでは、そのような問いがよく投げかけられていたように思う。時には本来のゼミの教科書から脇道にそれて投げかけられるそれらの問いに、自分なりの答えを考える機会を沢山いただいた。そのような、時にはとてもセンシティブな話題で多数の人が意見を交わすことのできる場所など、私は他に知らない。賛成でも反対でも、自分ならどう考えるか？ということを沢山考えさせられた。大学時代、ゼミはとても貴重な場であった。

「自分自身で考えられる人間になりなさい」
「歴史を学びなさい」

関口先生が口を酸っぱくして我々に投げかけてくださった言葉である。

自分の考えを持つために、歴史を学ぶ。考えるための材料を得るために本を読む。何が正しいかなど、わからない。善い悪いなんて断言できないけれど、少なくとも自分で考え行動できるように。

このような文章を書く機会を頂いた今、改めて、私は関口先生とそのゼミに出会うことができて本当に良かったと大学時代を思い返している。

感謝の念と、関口ゼミでの記憶を記すためにこの場を借りたいと思う。

私はＡゼミとＢゼミ、どちらにも所属していたのだが、Ａゼミではハンナ・アレント著の『人間の条件』を読み進め、Ｂゼミでは、『ブッダのことば―スッタニパータ―』を軸に学んだ。

ハンナ・アレントは、ヨーロッパ知識人の代表とも言われるだけあって、少し本を開けば、ソクラテス、アリストテレス、プラトン、カント…と、数多くの哲学者の名前が頻繁に出てくる。また、古代ギリシアの歴史や哲学の素養がなければ理解できない文章が並び、私には難しい内容であった。それでも、先生の解説にそって読み進めていくと、ほんの少しその内容に触れることが出来たように思う。特に労働と芸術作品との対比が興味深く面白かった。アレントがどのように思考して、何を言いたいのか読み解いていく時間は、楽しい時間であった。

Ｂゼミでは、初期の仏教を知る手掛かりとなるスッタニパータを読み進めた。原始仏教に触れる機会など、日常生活では有り得ない。時空を超えて古代インド人の苦しみや人生を垣間見るようで、こちらも大いに知的好奇心を刺激され、面白いゼミであった。

どちらのゼミでも、文章の意味を考え、みんなで意見を交わしながら内容をより理解していく形式であった。共通して、誰がどのような意見をしても、とりあえず皆きちんと聞く空気があり、内容にかかわらず発言者を馬鹿にすることはなく、対立する意見があっても感情的に相手を負かそうとしたりする事が無かったように印象に残っている。TwitterなどのSNSでもよく見られるが、自分と異なる意見をぶつけられると、自分が攻撃されたように感じて反論して言い負かそうとする人がいる。しかし、ゼミでの「議論」は、例え意見が違っても「共同で真理に近づくためのもの」であり、助け合いであるように感じた。決して他人を打ち負かすためのものではなく、一人一人を尊重する当たり前な態度があったように記憶している。学問のみでなく、そのような態度は社会をよりよくすると思う。

大学時代にこのようなゼミに出会えたことは、私に自信を与えてくれたし、興味のあった哲学や原始仏教などの世界を覗くことができた。何より、先生を始め、

個性豊かで素敵な人が沢山集まるゼミであったので、出会いがとても面白かった。
人生の中の一つの大切な時間として、ゼミで過ごした時間が残っている。あの時間が私を形作るひとつとなっているのは間違いない。

「SHOAH の上映会をやろう」
「『ローマ人の物語』あとは、『夜と霧』を読みなさい。」
「けっこう毛だらけ猫はいだらけ」
「お葬式じゃないんだからさ、誰か意見ない？」
「じゃ、酒当番に行こうか」

今でも先生の声が聞こえてきそうである。

関口先生、
先生とゼミに出会えて良かったと心から思います。
本当にありがとうございました。

「考えることと教養について」

山本　真大

私は関口先生と出会い大学生活を通して"考えること"について学んだ。先生が常日頃から言っていた"自分自身で考え、疑う姿勢を身につける"という姿勢は社会人となった今でも常に私の行動指針となっている。そして、この姿勢こそ世間で言われている"教養"につながるものなのではないかと私は考える。
それでは"教養"とは一体何だろうか？
村上陽一郎著「あらためて教養とは」の序章で村上は「自分の中にきちんとした規矩を持っていて、そこからはみ出したことはしないぞという生き方のできる人こそが、最も原理的な意味で教養のある人と言えるのではないか。」と主張し

ている。また同著にて、「その上に、一般的な意味での教養、つまり何がしかの知識、何がしかの経験、そして専門家としてではなく、人間一般としての「広さ」、そうしたものが相俟って教養が論じられるようになる」と述べている。(p 28 村上 2009 新潮社) このように村上は二つの尺度から教養について議論を展開している。関口先生がゼミや講義で最も伝えようとしていたことは、村上の述べている原理的な意味での教養を身につけることなのではないかと私は考える。

なぜなら、関口先生は「自分が絶対に譲れないものを一つだけ必ず持つようにしなさい」と学生に対して頻繁に言っていた。これが原理的な意味での教養であり、この上に大学生活で学んだ知識や経験が身につくのではないだろうか。

"教養"は現代人が避けて通れない言葉である。だからこそ学生のうちに"教養"とは何か、そして"考えること"について語り合う時間が必要なのではないだろうか。

私は大学生活を通じて学部の講義やサークルの活動などの多種多様な経験に際して抱いた疑問・そして自分の考えや意見を他の学生や教授と論じることのできる環境があり恵まれていた。そしてその環境を私にくれた関口先生、そして先生のもとに集うゼミ生や OGOB に感謝をしたい。

参考図書
村上陽一郎「あらためて教養とは」
新潮文庫 2009

「哲学する場」

越智　裕一

研究会は人間の条件を基本として政治、宗教の話にも派生し、時には社会問題や学生行動、果てはゴシップ記事までも題材にした。そして、参加者である学生や社会人に「どう思うか？」と常に問いかけた。関口教授からは、考える事、そ

して何より、対等な立場でその考えを自由に語り合う場、言い換えると、”何の制約もなしに語り合える場”の意義を教えて頂いた事が最大の恩恵である。

学生を含め、社会で日常生活を送る人間にとってそうした場は少ないのではないか。社会性ある（※社会＝何かしらのコミュニティに属しているという意味）人間であるならば、常にその相互性、利害関係、空気等により、意図せずとも発言にかなりの制約が生じているはずだ。例えば、その場の流れに沿わない発言は空気が読めないと白い目で見られたり、宗教や政治の話題はタブーとされる事など、振り返ると思い当たる事は多い。

しかし、関口教授の下ではそうした制約がなく、各々が思いの丈を極めてニュートラルな状態で発言した。教授からの講義、提供頂いた話題を基にした参加者の発言は実に面白く、その発言に対する教授による講義・知識により、更なる発見や自身の考えを深める事にも繋がる。毎週、研究会の時間だけでは足りずに、行きつけの居酒屋で続きを行ない、夜遅く迄あれやこれやと話し合いをした。会計の際、長丁場にも関わらず割安であった事に、それ程迄に話が盛り上がったのかと感心した事が印象深い。

「何でもいいから、意見を言ってごらん」「（学生の発言の後）それに対して、どう思う？どうだろう？」と関口教授は毎回発言を促した。振り返ると自分の質問や発言が愚かだなと思われたくないから発言しない機会もあった。関口教授は承知の上で、知識や理論抜きにして、考え、疑問を何でも良いから話す、自由に語り合う事が哲学の入り口であると教えて下さったのかも知れない。

関口教授からは、考える・伝える・聞くことの面白さ、大切さを学ばせて頂いた。それと同時に、そこに至るには興味関心と知識が必要であるとも学ばせて頂いた。疑問を持つ、考えるためには、常にアンテナを張って情報を集め、本を読み知識を付けなければならない。関口教授が都度発していた「本を読め、新聞を読め」という言葉は、社会人になり痛い程わかる。そして今、研究会でご教示頂き、自分の机積み上がった本を徐々に読み進めている次第である。

関口和男教授はご逝去されているが、未だに実感が無い。自分の日常生活で何かしら出来事と対面し、思案する際に「関口教授であれば、どう考えたであろう。」と想像を巡らし、考える日々を続けている。

「関口君の思い出」

早稲田高校 69 回同期生・四戸　純一

2017 年 3 月 8 日、君は溘焉として逝ってしまった。

その訃報を聞いたのは 1 ヶ月後、青天の霹靂だった。高校卒業後 50 周年の記念誌を発刊すべく、君に原稿依頼の連絡をしようとしていた矢先で、気持ちがうまく整理できなかった。

振り返れば、中学の頃はそれ程の交流はなかったね。話すようになったのは高校一年生の時、米ソ冷戦下でのベトナム戦争の時代だった。1964 年のトンキン湾事件を引き金に米国が北爆を開始、本格的に軍事介入した頃、政治問題に敏感なマセガキ達が、北爆の正当性を主張する者たちと北ベトナム・南ベトナム解放民族戦線（通称ベトコン）の正当性を主張する者たちとに分かれ、休み時間に熱くなって論争したものだった。その中で黙って聴いていた君は、休み時間の終了する頃になると、客観的で原則論的な視点をポツッと提示して自分の教室へ戻って行った。そこでの佇まいが、妙に今でも印象に残っている。

それから幾星霜、君は法政大学人間環境学部の教授になっていた。多忙な君と会うようになったのは、1998 年に六鳩会（高校の同期会）を結成してから。特によく話すようになったのは 2008 年頃、社会人講師としてゼミに誘われてからだったように思う。ゼミ生と一緒の飲み会や、友人の大森・明治大学教授と山田元紀さんの 4 人で神楽坂の君の行き付けの店で呑んだこと、酒量が進むとベランメエ調の口調になるなど、その時間が懐かしい。

君を偲ぶ会には、教え子が多勢出席していた。君の学生たちへの接し方、そして教え子たちからどれほど慕われていたか、得心する思いがした。専門分野のドイツ哲学は無論のこと、何故、アーレントを選ぶようになったのか、何故、学生たちに仏教を教え始めたのか、まだまだ話したい事が多かったのだが・・・

‡　‡　‡　‡　‡

先日、長峰先生とご一緒に君の墓前を訪れた。墓碑銘には「夕景ひとつの礼を言う」の碑文。何故この字句が刻まれたのか詳細は知らないが、君の晩年の心持

ちが偲ばれる思いがした。関口和男は精一杯生きたのだ。

ゴッホの詩に、「死者を死せりと思うなかれ。生者のあらん限り、死者は生きん、死者は生きん」とあるが、1年以上経た今もこの思いが深い。

「レクイエム」

山田　元紀

ガン化した胃粘膜のポリープ除去手術が終わり鎮痛剤の影響でまだ意識がややもうろうとしてベッドに寝ていたとき、井上先生から電話があって、昨日関口先生が亡くなったことを知った。前の月に、お見舞いに行った時には確かに病状が相当進んでいるように見受けられたけれども、まさかこれほど早くお亡くなりになるとは想像もつかなかった。先生の死と自らの胃がんのこととが重なって、人の世の無常さにしみじみと感じているときに、旅人の歌をふっと思い出していた。

「世の中は空しきものと知る時し　いよよますます悲しかりけり」

そして、18年間に及んだ先生の授業の様子や様々な出来事がつぎからつぎへと脳裏にうかんできたのを覚えている。先生がいなくなってしまっては、通いなれた毎週金曜日のオフィスアワーもアレントのゼミもこれで終わりになると思うと寂しさで胸がいっぱいになった。

2000年9月からアレントのゼミに参加して2017年3月に先生が亡くなるまで、先生の深く広い知識に裏付けされた知性とあふれんばかりの豊かな感性での授業を受けていて、知らず知らずのうちに学ぶことの楽しさと考えることの大切さを身に染みて思い知ることができた。そして、先生とともに過ごしてきたこの年月は私の人生にとって何ものにも代えがたくそして忘れがたい貴重な18年間となった。

ハンナ・アレントの『人間の条件』やカール・マルクスの『経済学・哲学草稿』、

『ドイツ・イデオロギー』、アメリカ人の若手の研究者の論文『Population』、『Sustainability』を読むことを通して外なる世界への関心が高まり、ギリシャ、ローマ、中世、ルネッサンスそして近代の歴史を学ぶことへとすすみ、そこから現代へ眼差しを向けることができたと思う。

そして、初期仏教経典の『スッパニタータ』、『ダンマパダ』を読みおわり『歎異抄』や『正法眼蔵随聞記』を読むと仏教の複雑さと奥の深さをしみじみと味わうことができたものだ。その一方で古代ギリシャの悲劇作家アイスキュロスの『オレステス』を読むと東洋と西洋の違いと共通するものをみるときに、生きるとは何か、という永遠にして最も深刻な問いであり、人の歴史を貫いている不可知なる問いを問い続ける事が内なる世界への関心の高まりへと結びついていくことに気づくことができた。こうした授業で取り上げる文献のほかにも古典文学や古典音楽のかずかずを紹介していただき、本を読むことと音楽を聴く機会がことのほか多くなった。そのうえ、読んだ本や聴いた音楽について先生と議論しあうことでさらに多くのことを学ぶことにつながってゆく。こうした積み重ねのなかで、新しい知識を得ることに驚くほどの興奮を覚え、学ぶことの楽しさを大いに実感することができた。このような時間と空間はまことに得難いものであり、そのことを実現していただいた先生にはどのように感謝をしてもしつくしきれないと思っている。

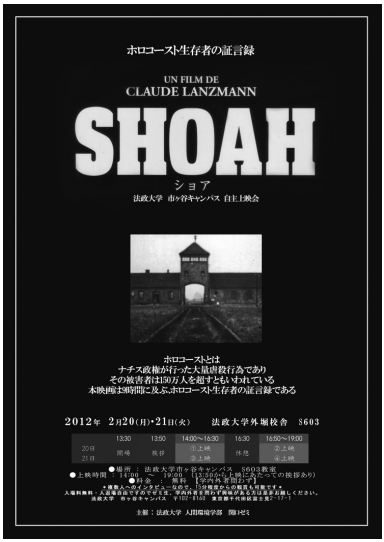
さらに、ナチス・ドイツのユダヤ人絶滅政策にかかわった関係者へのインタビューをもとに製作され、上映時間が9時間半にも及ぶ映画『ショア』を数回も見たことは、とても忘れることのできない衝撃的な経験であった。実際、この映画の上映は企画した先生もそして見る側もよほどの覚悟と根気がなければ付き合えるものではない。この世でありえないような出来事、全体主義がおこなった人類史上最悪の事実を目の当たりにしたとき、その圧倒的な事実に打ちひしがれ、だれもがしばし本当に言葉をうしなった。しかし、ヒットラーやスターリンが居なくなったからといって地球上から全体主義の危険性がなくなったのではない。『ショア』を見るというのは、単に現代史を学ぶということにとどまらず、目をそむけたくなるものを避けて通るのではなく、真正面から向き合うことがいかに大切なのかを学ぶ機会につながったのだと思う。この上映企画はゼミ内にとどま

らず、セミ生の高島佐代子さんが作ったポスターで学部内に広報してみたものの残念ながら参加者はゼミ生だけであった。

つまるところ、先生は学生たちに一体なにを学んでほしいと願ったのだろうか。アレントは『人間の条件』の中で、「思考の欠如こそ、私たちの時代の明白な特徴の一つように思われる。」と書いている。関口先生は、現代社会はすでに思考の欠如を通りこして思考喪失の状態にあるといった。そして、それがいかに危険であるかをゼミ生たちにたびたび伝えていた。つまり、先生がゼミ生たちに学んでほしかったのは、思考する力を培うことを願っていたのではないか。アレントも、生きるとは思考すること、といっているように、思考する力こそが、自らの人生を自らの手で生きぬくことにつながるというお考えであったと思う。

こうしてみると、関口先生のゼミはいかにも堅苦しくて窮屈のように感じるかもしれない。確かに、アレントの『人間の条件』は何度読み返してみても何が書いてあるのか全くわからないことだらけだ。だからわずか一行足らずを読み解くのに一回の授業を費やしてしまうことも度々あったくらいだ。この難しい本に真剣に取り組んでいると一時間半が極度の緊張感とともにあっという間に過ぎてしまう。

けれども、先生はどのような時でも、ゼミ生たちにとってなにがもっとも望ましい授業のありかたなのかを常に模索されていたようだ。そして、先生はこうした授業の在り方が、ゼミ生たちにとって本当に望ましいものであるかどうかを常に心配しておられていた。そこで先生は、この緊張を解きほぐすための飲み会を開いてくれたのだ。授業では一言も話すことができなかったゼミ生も飲み会でようやく緊張が解けて、先生やほかのゼミ生たちと肩ひじを張らずに話をする機会を得ることに



「SHOAH 上映会ポスター」作：高島　佐代子

なる。こうした先生の配慮があってゼミ生たちは次第に授業にコミットメントするようになり、まがりなりにもそれなりの発言をするようになって卒業してゆく。その成長ぶりを目の当たりにして、先生は本当にうれしそうに彼らの成長ぶりを私に話してくれた。そして、先生はゼミ生たちとの腹蔵のない本音の会話がまさに教師冥利に尽きるのだ、と再三言っておられたことをよく覚えている。

オフィスアワーでも何人ものセミ生や時にはOBOGたちも顔をだし、先生をまじえて世代を超えた会話が取り交わされる。だれもが自分の意見を表明して誰とも意見の交換ができる、そのことがどれほど楽しいことなのかを改めて知ることができ、そうした場の展開を楽し気に見ておられた先生の姿がいまでも脳裏に焼き付いている。

こうしてみると、このゼミはなにか異次元の世界の出来事のように見られがちであるが、決してそのようなことはなく、実に開かれた空間であった。というのも、セミ生といっても学部生だけではなかった。他学部の学生や他大学の学生や大学院生、時には卒業生たちや社会人も授業に加わって一緒にアレントの『人間の条件』を読んでいた。

あるとき、明治大学・政治経済学部の大森正之先生がご自分のゼミのゼミ生まで同行されてアレントのゼミに数回にわたり来られたことがある。大森先生も一人の受講生として加わり、授業後の恒例となっている飲み会にも参加され、誰彼の区別なく楽しそうに話しをしておられた。その時の大森ゼミの一人がアレントをテーマにして優れた卒論を書いたと大森先生からあとになってお聞きしたことがある。今日、これほど開かれた場はめったにお目にかかることはなさそうだ。

私が大学院に入学した2003年の春、突然関口先生が奥多摩でフィールドスタディ（FS）を実施すると言い出した。よかったら手伝ってほしいと云われ、喜んで引き受けることにした。そこで、先生と早速カリキュラムを作り、私は現地での受け入れ態勢の調査と受け入れの依頼など、FS実施の準備に取り組んだ。この年から3回にわたり奥多摩でFSを行った。そして、そこに参加していた一部の学生たちがさらに奥多摩のことを学びたいということで、森林保護のNPOや東京都の森林保全にかかわっている職員をお招きするなどして勉強に取り組んでいた。この活動の先に、「水と緑フォーラム・法政（ミズミド）」が誕生するこ

とになる。このような学生諸君の熱のこもった活動は、2005年11月12日に、ボアソナードタワー26階スカイホールで、シンポジウム『奥多摩を見つめなおして～森林を考えることの意味を問う～』を開催するまでに成長を遂げることになる。この時の会場に大勢の千代田区内の企業関係者などと一緒に千代田区役所の環境保全課の職員も参加していて、このことを契機に千代田区と法政大学との関係がより深まることになる。そして、両者間に千代田区の環境政策に関する協定が交わされることとなり、まさに瓢箪から駒、という事態へと発展していった。

そこから出てきた駒の一つは、学部内での「CESゼミ」の立ち上げであり、もう一つは千代田区立九段中等教育学校一年生を対象とした環境教育の実施と千代田区立麹町幼稚園と昌平幼稚園の園児を対象とした環境教育実施の要請であった。そして、これら一連の活動は千代田区内の企業関係者と千代田区の協力のもとに大学生が活動の主体となって行われたものであることはいうまでもない。ついでながら、九段中等教育学校の一年生の一部のグループはこの環境教育を受けたことをテーマにした壁新聞が全国コンクールで最優秀作品として表彰されたことを記しておこう。

また、千代田区とは別に、ミズミドの一連の活動記録の展示をボアソナードタワーでたまたまご覧になった神奈川県立城山高校の校長先生がぜひとも高等学校の生徒を対象にして大学生による環境教育の実施を、との依頼が当時の学部長あてに届いた。それで、関口先生とともに城山高等学校におもむき、一年に一度1年生全員を対象にした環境教育を行う運びとなったのである。

こうした一連の活動とかかわることができたおかげで、人間環境学部入学の動機である環境教育を学びたいという思いもこうして数々の環境教育の現場を経験することができ、修論もこのテーマですんなり書き上げられた。

先生の蒔いた一粒の種から、多くの活動が動き出し、多くの学部生たちが熱心にそれらにかかわり、豊富で実りある経験をすることにつながったといえよう。しかし、先生は活動を目的とは考えてはいなかった。活動はあくまでも何かを学ぶための手段だと考えておられた。手段と目的の極めて微妙な関係は、気を付けないといつしか手段が目的化してしまう。そのことを先生はいつも学生たちに戒められていた。

そして、環境教育にかんして、その総括ともいうべき論文を先生と田中慎太郎君の三人で書くこととなった。じっくりと内容を検討して、何を書くのか何のために書くのかなどを何度も話し合い、何度も書き直して、2年近くかけてようやく書き上げたのが、『環境教育の現状と課題についての批判的考察～環境教育の未来に向けて～』である。この論文は、法政大学教育開発支援機構FDセンターが発行する『法政大学教育研究･第4号』（2013年7月31日）に収載されている。18年間の数ある思い出の中で、これほど深い感動と喜びを感じた二年間はまさに得難く、振り返れば人生の宝物である。

そして、関口先生ご自身は何時になっても学ぶこと学び続けることにとどまらず、いつもあふれんばかりの好奇心から様々な分野の書物を読まれていて、おりおりにそれらの本を紹介してくださっていた。その中で､もっとも興味い一冊が、工藤庸子著『ヨーロッパ文明批判序説～植民地・共和国・オリエンタリズム～』(2003)東大出版会､だ｡これも簡単には読めない本であったがとにかく読み終わってから、いつものようにこの本の感想やらを先生と話をしていて、グローバル化を進めようとしている現代において、西洋と東洋とはお互いに理解しあえるのだろうかという問いが生まれ、その後この問いは何度も話し合うテーマとなった。

本の紹介にとどまらず、クラシック音楽についてはオフィスアワーで先生からバッハの話を聞く機会が多かった。どうも、先生は敬虔なプロテスタントのバッハがお好きなようであった。私もクラシック音楽は好きだけれども、バッハとなると苦手意識があって聴く機会もないままであった。そんな私に、先生一番のお気に入りであるバッハの『マタイ受難曲』をぜひともといって薦めてくださった。そこで、ものは試しとカール・リヒターのCDを聴いてみた。3時間半という長さの音楽を聴いたのは初めてだった。しかし、何度も聴いているうちにいままで敬遠していたバッハの音楽に段々と傾倒するようになった。

丁度、2016年3月に聖トーマス教会合唱団とゲバントハウス管弦楽団という最高の組み合わせによる『マタイ受難曲』の演奏を東京芸術劇場で聴く機会があった。完成度も高く本当に鳥肌がたつような演奏であり、聴き手に深い感動を与えるものであった。後日、この時の感動や感想を先生に伝えると、本当にうれしそうに私の話しを聞いてくれて、私は実際の演奏とあとでそれを先生と共有すると

いう二度にわたって音楽を楽しむことができたのである。

2017年11月16日午後10時ころ、すこし興奮した面持ちで市ヶ谷駅のホームに佇んでいた。東京オペラシティコンサートホールでモツアルトの『レクイエムを』聞いての帰り、ホームから外堀の薄黒い水面をぼんやりと眺めていてふっと思い出したのは、飲み会が終わってこの場所この時間に何度も関口先生と一緒に立って居たことだった。

モツアルトのレクイエムは、先生が最後に勧められたものであり、先生の存命中にはCDも聴く機会がなかった。それが、先生がお亡くなりになった後で偶然にも聴く機会があり、しかもそれを聴いた後でこの場所に佇んでいることが、親鸞ではないが、なにか不思議なよるべき縁、といったものをつくづく感じてしまう。

残念なことに、もう本を読んでも音楽を聴いてもそれについての感想などを言葉で伝えたい先生はもういない。これからはわが胸のなかで、言葉のない会話を先生としようと思っている。

そしていまはもう、先生の魂の安らかなることを願うばかりである。

主よ、永遠の光を彼らに照らしたまえ。

モツアルト「レクイエム」

S. Takashima